

庭文庫 視察のご案内

このたびは、庭文庫に興味を持ってくださり、ありがとうございます。

2018年4月にオープンした庭文庫は、まだ手探りの中で運営をしています。営業日に庭文庫を見ていただく分には、お客様としてぜひお越しいただけたらと存じますが、時間をかけて話を聞きたい、という方に対しては視察料を頂戴しております。視察の詳細については、以下をご覧ください。

■視察料

視察人数 4名以下 15,000円（1.5時間程度）

視察人数 4名以上～10名以下 20,000円（1.5時間程度）

視察人数 10名以上～ 対応が難しい場合があります。ご相談ください。

■対応日時

基本的には庭文庫の定休日の火・水・木で対応できると幸いです。

時間帯は10時～17時のご都合のよいお時間をお知らせください。

■対応者

百瀬 実希（旧姓：中田 実希）

1990年沖縄生まれ。大阪市立大学卒業後、東京のイベント企画会社勤務。2016年岐阜へIターン。

2017年1月より出張古本屋「庭文庫」スタート。2018年4月より実店舗にて古本屋「庭文庫」オープン。

現在は、百瀬 雄太と一緒に二人で庭文庫を運営しています、

■当日の内容

10分 庭文庫店舗見学

30分 庭文庫ができるまで～現在まで包み隠さずお伝えします

- ・どうして庭文庫をはじめたか
- ・はじめるときにかかったお金など
- ・はじめる前はどういうことが必要だったか
- ・なぜ補助金をもらわずにスタートしたいか
- ・はじめてみて実際どうか（どんな方が来ているか、地域の方とのつながり）
- ・今後について

15分 事前に頂戴していた質問にお答えします

35分 質疑応答など

※一例です。ご希望やご要望にあわせて内容の変更は可能です。

※庭文庫ができるまで～現在までをまとめた資料をお渡し致します。

■お申込みについて

以下の内容にご記入の上、庭文庫 niwabunko@gmail.com までご連絡ください。

視察料金に関しては、当日お持ちいただくか、後日お振込みでお支払いください。（振込手数料はご負担ください。）

- ・お名前
- ・所属
- ・お電話番号
- ・メールアドレス
- ・参加人数
- ・視察希望日時（複数日あげていただけると幸いです）
- ・その他ご質問・ご要望など（請求書などが必要な場合もこちらにお伝えください。）

■お問い合わせ

庭文庫 百瀬実希

niwabunko@gmail.com

080-4113-4790

〒509-7207 岐阜県恵那市笠置町河合 1 4 6 2-3

■メディア掲載

○TV

- ・ケーブルテレビアミックスコム「スター列伝」（2018年5月14日～2018年6月放送）
- ・NHK「まるっと！ぎふ」（2018年5月21日放送）
- ・CBC放送「イッポウ」（2018年5月30日放送）
- ・テレビ朝日「ニッポンの秘境！スター野宿度！！」（2018年7月8日放送）

○雑誌・フリーペーパー、ウェブマガジンなど

- ・西濃印刷「aun 第68号」（2018年3月25日発行）
- ・WEBマガジン70seeds「客が掃除に来る「古本屋」小さな街で人が集まる理由をつくる」
<https://www.70seeds.jp/niwabunko-366/>
- ・マガジンハウス「&プレミアム」（2018年7月20日発行）

○新聞

- ・2017年7月21日 岐阜新聞東濃版
- ・2017年10月29日 読売新聞岐阜県版
- ・2017年4月 共同通信社文化面（全国各紙）
- ・2018年6月4日 毎日新聞岐阜県版一面

岐阜まちなか再発見フリーマガジン

aun

68th Issue
SPRING 2018

2018年3月25日発行 (年4回発行)

読者プレゼント多数!!

それぞれの移住スタイル
岐阜に暮らすということ。

ACTIVE G & GIFU CITY TOWER43

アクティブG

暮らしを丁寧に

岐阜シティ・タワー43

特別な日を彩るといふときグルメ

aun Recommend Shop

大家食堂 大崎亭

テイクアウト&デリバリー BLITZ coffe

ポピンヘッド

a un selection

岐阜まちなか中華メシ

a-un WEB マガジン
<http://aun-web.com>

take free [無料]

撮影協力: 庭文庫

岐阜県
恵那市



「移住後の支援にさらに力を入れていきたい」と語るのは、移住者を支援する「恵那暮らしサポートセンター」職員の中田実希さん(26)。「恵

恵那への移住者支援

那市大井町。沖縄県出身。昨秋、恵那市の地域おこし協力隊員として着任した。自分も移住者という視点を生かし、同市への移住を考える人の相談や空き家の紹介業務などのセンターの仕事に取り組む。

3年の任期後は同市に定住する予定。本好きが高じて古本店「庭文庫」を創業し、市内外のイベントに出店している。地域の魅力を見つめながら「自分なりに定住を模索したい」と意気込む。

夢は泊まれる古本屋

中田 実希さん 27

恵那市移住定住
コンシェルジュ



那覇市生まれ。休日には最近始めた藍染め教室に通ったり、草木染を行ったりするが、「子どもの頃から好きだった読書で過ごすことが多い」。志村ふくみさんらのエッセーが好き。お気に入り日は日本画家東山魁夷のエッセーで、「絵もいいけれど、言葉もすこくすてき」という。

あらゆる相談に応じることが出来るセンターを、少しでも充実させていきたい」と意気込む。

自身も東京からの移住者。大阪の大学を卒業後、東京で講演会を企画するイベント会社に就職した。「仕事は楽しかったけれど、あまりに多い人に疲れ果て」、16年3月、恋人の住む隣の中津川市に移り住んだ。

小さい頃から読書が好きだった。4人きょうだいの一番上。「いい子でないきや」という気持ちから逃れるために、読書に没頭していました。大げさかもしれませんが、本がなくてはいけません、ぐらいの思いでした」と振り返る。

移住して半年間、何をするか考えた。たどり着いたのが、「田舎で古本屋を始めること」。「ベストセラー以外の本に出合える場がない。田舎の庭を開放して、多くの人が

本に出合える場所を作りたい」

だが、見ず知らずの土地で、人脈もお金もなかった。そんな時に協力隊員募集を知り、「仕事をしながら、自分の住む家探しもできる」と応募。面接では「空き家バンクの調査をしながら、古本屋ができる物件を探すことが応募の目的」と正直に打ち明け、採用された。

何件か空き家をあつせんした。空き家バンクで求めていた家を見つけ、定住に至った時はうれしかったが、地域のひとなじみず、出ていったケースもあり、移住、定住の難しさも知った。

協力隊員の任期は19年3月まで。それまでに、自分が納得のいく家を探すのが目的だ。

今年1月には、出張古本屋「庭文庫」を始めた。月に2回、イベントなどで古本を販売する。「将来は、老若男女が本との出会いに胸をときめかす場所作りをしたい。泊まれる古本屋が究極の目標」と目を輝かせた。

(松原輝明)

姫さん扮
中京学院
0人のお
練り歩く
祝日に年
人をもと
シーも
日)では
平餅、
ゴ枕、
相葉子が



恵那市の「地域おこし協力隊員」として2016年10月に採用され、市外からの移住希望者に対し、空き家バンクに登録された物件をあっせんする仕事などを担当。8月29日からは、恵那駅近くにオー

プンした「恵那暮らしビジネスサポートセンター」で、移住、定住の相談員(コンシェルジュ)を務める。また開設されたばかりだが、「移住、定住のためには、職場を見つけていくことも大事。

びゅ~まん 岐阜

仮装してイベントを楽しむ児童

通じたので楽しく遊べまし

心に社職やフランス料理、
日本料理など20の

三番街通廊りをPRする関係者
(中津川市の市職光センターで)

相葉子が

若者2人 岐阜にオープン



「庭文庫」で。中田さん(左)と百瀬さん

書店「庭文庫」を運営する百瀬雄太さん(30)と中田美希さん(28)だ。ここから車で15分ほど走ったところに、庭文庫はある。

築100年以上の古民家を改装した店舗。そぼではツバキやスイセンが咲き誇る。新緑が美しいユズの木立の先に、雄大な木曾川が緩やかに流れる。1階は3千冊以上の本の2階は春秋、宿泊施設としてオープンする。

「畳の上で本を読み、いつ来てもいいし、いつ帰ってもいい、というのがコンセプト。百瀬さんは『ただここにいたい』ことができないという意味がない。せつかくて来たらいいから、例えば風が揺れる草木を見つめる時間を過ごし、日が落ちて少し空気が冷たくなるのを、肌で感じてもらうことが重要」と語る。確かに、

田舎に古書店 文化の扉

消費社会が成熟すると、人々の欲望は、少しでも新しいものに向かって猛進する。当然、経済規模が大きい都市部には新しいものが集まるため、多感な若者が吸い寄せられる。では田舎には新しいものはないか？「いや、何もかもある」と話す若者2人。岐阜県恵那市に、市内唯一の古書店を始めた2人を訪ねた。(川村敦=共同)



飛行機、田んぼ、溪谷平地に並べられたソーラーパネル……。名古屋から、窓の大きな長野行きの特急電車に乗り40分。だんだん景色は、都会のそれと違ってくる。JR恵那駅の改札口で出迎えてくれたのが、古



築100年以上の古民家を改装した古書店「庭文庫」の外観

自然の中で自由に読んで

も違つようだ。恵那市出身の百瀬さんと、那覇市出身の中田さんは、大学卒業後、東京で会社員として働いていた。2人と、都会の「文化的なもの」に憧れを持っていったという。しかし閉塞感に嫌気が差した百瀬さんが帰郷。中田さん呼び寄せた。

なぜ古書店なのか。恵那市の人口は約5万人。新刊書店はいくつかあるが「ベストセラーの本ばかり。新刊書店で買えなくても、新旧の良い本があることを知ってほしかった」(中田さん)。

書店調査会社アルメディアによると、全国の新刊書店数は2000年以降、約42%減少。出版取次大手トーン・ハンによると、書店のない市町村も昨年7月時点で全国420に上る。自分にフィットする本と出合えないのは、恵那市だけが直面する問題ではない。

「田舎には自然しかない、といわれます」と百瀬さん。「じゃあ田舎に文化的なものがない」。ただ、本は買

「ただ、本は買いたい、読みたい、ないことも多い。文庫では、来たら本を薦めたい」と百瀬さんはそれを「表現する」。

「託す。それによってきた人間の営み、そして託すだけの方が多いの」。

「ただ、本は買いたい、読みたい、ないことも多い。文庫では、来たら本を薦めたい」と百瀬さんはそれを「表現する」。

「託す。それによってきた人間の営み、そして託すだけの方が多いの」。

「本の物語」次につなぐ

【横田伸治】
 恵那市笠置町河合で、古民家を改装した古本屋「庭文庫」は、美しい木曾川を見下ろす絶好の場所にある。中田実希さん(27)は2016年に東京から移住し、今年4月から店をオープンした。築100年以上という歴史を感じさせる落ち着いた空間には、3000冊を超える本が並ぶ。この店は、地元の人が「また本を持ってきたよ」と、本を譲るために立ち寄る交流の場になりつつある。

中田さんは大学卒業後、14年から東京のイベント企画会社で2年間勤務した。仕事にはやりがいがあったが、満員電車で揺られる都会の日々に疲れを感じつつあった。そんな中、現在の婚約者であり、「庭文庫」を共同で経営する百瀬雄太さん(30)と出会った。百瀬さんは恵那市出身。中田さんと同様、都会に疲れ、仕事を辞めて地元へ戻った。1年後の16年、中田さんも百瀬さんの実家に転

あつせんする仕事に就いた。休日には「とりあえず店舗が無くてもいい」と出張古本屋を始め、地域のイベントなどに出席。手探りで古本屋経営のノウハウを徐々に身につけていった。そのうち、地元の人から「うちにも本があるよ」と声をかけられるようになった。2人で準備しきれないと昨年12月、「古民家おそ

「庭文庫」店主 中田実希さん(27)



「庭文庫」店主の中田実希さん。恵那市笠置町河合で

た。出張古本屋を続け、昨年10月には在庫が2000冊を超えた。同頃、現在の店舗となる物件を借りることができた。元々は養蚕農家の建物。空き家になって10年、床が崩れてスズミ棚を作り、ついに4月28日、「庭文庫」はオープンした。それぞれの持ち主の思いが詰まった本。二束三文で買われるよりは、信頼できる人に譲りたい」という本の所有者の好意に甘える形で、「庭文庫」では現在も古本の買い取りはせず、無料で譲り受けている。

なかだ・みき
 那覇市出身。「知らない町は楽しい」と、高校卒業後は大阪の大学に進学し、東京で就職後、恵那市に移住。「庭文庫」営業時間は金曜～月曜の午前10時～午後5時。問い合わせは庭文庫のホームページ (<http://niwabunko.com>) へ。

現在の在庫は、小説や詩、雑誌、漫画など3000冊以上。本を譲ってくれた地元の人から手書きの本を紹介するコーナーもある。中田さんは自分が好きな近代詩、百瀬さんは思想・哲学など人文学系の本を充実させたいと意気込む。「本はただの物じゃない。持ち主の記憶や思い出といった『物語』ごと、次の人につなげていきたい」と、2人は懸け橋

役割を担いたいという。今月からは店内でコピーを提供し始める。庭でカリーの屋台を出す計画、店舗の2階に宿泊できるように改造する計画もある。毎月28日を「庭の日」ばかりだ。

ととして、さまざまイベントも企画中だ。平日の仕事と古本屋店主を掛け持ちする中田さんは「もう、本当に忙しい」と笑うが、夢は「どんどん膨らんでいく」ばかりだ。

〈取材メモ〉中田さんは明るい笑顔と楽しそうな話し方が印象的だった。庭文庫は店内の空間、店外の景色、共に息をのむ美しさ。取材後、ジャック・ケルアック「路上」、アンリ・ベルクソン「時間と自由」など3冊を購入した。

明るい笑顔と話し方、印象的

